

インナードライ対策「脂性肌対策と乾燥対策を同時に行う」

インナードライとは、油滴の分泌により皮膚表面はべたついているのに、角質水分量の減少により肌の内側は乾いている状態を指します。多くの方が、洗顔剤や油取り紙、アルコール配合の化粧品を用いて皮脂を取るといふ脂性肌(オイリー肌)対策をされますが、これらの行為はベタツキ悪化だけでなく、乾燥悪化にもつながり、ますますインナードライが悪化するため注意が必要です。インナードライ解消には、油滴を薄める脂性肌対策と同時に乾燥対策を行うことがポイントです。

※混合肌との違い・見分け方：

混合肌は、Tゾーンはべたついているのに、頬は乾燥するというように、部位によって現れる症状が異なります。インナードライは、同じ部位で乾燥とベタツキを感じます。洗顔後、基礎化粧品を何もつけずに10-15分過ごし、始めはつっぱったりカサカサした後、同じ部位が次第にヌルヌル(ベタベタ)する場合はインナードライ肌であるといえます。

インナードライの原因「洗顔のし過ぎ」

脂性肌(皮膚表面がベタベタする)の要因は、皮脂量が多いことよりも、毛穴から分泌される脂が油滴：油のかたまりであることです。通常、毛穴からは皮脂(サラサラ)が分泌されますが、石鹼を含むほとんどの洗顔剤には合成界面活性剤が配合されており、洗顔剤の継続使用によって毛包内のアクネ菌(油滴を皮脂に変えるために必要な菌)を取り過ぎた結果、毛穴から皮脂ではなく油滴がそのまま分泌されるため、皮膚表面にべたつきを感じるようになります。

また、洗顔剤に配合の合成界面活性剤は、角質バリアに必要なセラミドを流出させるため、継続使用はターンオーバーを早め、慢性的にセラミドが不足した未成熟な角質の量産・蓄積につながります。結果、角質層の水分量が減少することで、乾燥につながります。

「保湿のし過ぎも乾燥悪化を招く」

洗顔後、乾燥対策として使用される乳液・クリーム・オイル・美容液などの保湿化粧品には、合成界面活性剤やアルコール、多量の油分や化学薬剤が配合されています。継続使用は、角質バリアを壊して、ターンオーバーを早めるため、保湿すればするほど乾燥悪化につながります。

インナードライ対策のポイント「脂性肌対策と乾燥対策を同時に行う」

1. 脂性肌対策

- **洗顔をし過ぎない**：特に洗顔剤を用いると、配合の合成界面活性剤がアクネ菌を流出させ、サラサラ皮脂ではなくベタベタ皮脂(油滴)が分泌されるため、かえってベタツキ悪化につながります。
- **ベタベタ皮脂を薄める**：海の森化粧品に含まれる脂肪分解酵素、タイプ1のセラミド(リノール酸)がベタベタ皮脂を分解し(薄め)ます。合成界面活性剤・アルコール不使用で、必要以上のアクネ菌の流出を防ぎます。毛穴から油滴ではなく適量の皮脂が分泌されるようになり、ベタツキを繰り返さなくなります。
- **ポイントメイク・薄化粧**：クレンジング/洗顔剤(合成界面活性剤)の使用量を減らします。

2. 乾燥対策

- **保湿化粧品を極力使用しない**：保湿すればするほど、配合の合成界面活性剤やアルコールによって角質バリアが壊れ、ターンオーバーが早くなることで、乾燥悪化につながります。
- **バリアケア**：海の森化粧品に含まれるリノール酸が壊れた角質バリアを修復します。全て自然な原料且つ油分(リノール酸)を含む含有成分量は微量、合成界面活性剤・アルコール不使用で、ターンオーバーが正常に機能する環境を整えます。徐々に、肌自らの力で皮膚バリアを維持していくため、乾燥しにくい(しない)肌へ導きます。

「乾燥から肌を守るために皮脂分泌が過剰になるという考え方について」

インナードライで皮膚表面がべたつく理由として、一般的には、肌が乾燥し、乾燥から肌を守るために皮脂が過剰に分泌しているためとされています。しかし、皮脂(皮脂膜)のうるおいを保つ働きは2-3%と、乾燥を防ぐ力は元々ありません。また、皮膚には飽和皮脂量という、一定量皮脂が分泌されると、皮脂腺に圧がかかり、皮脂が過剰に分泌されないようにする仕組みが備わっています。そのため、乾燥を守るために皮脂が過剰に分泌するという考えには無理があると考えます。皮膚表面がべたつくのは、皮脂量が多いのではなく、ベタベタする皮脂(油滴)の分泌が大きな原因となります。